走行妨害

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
走行妨害

【Ｎコード】
Ｎ７３２２Ｈ

【作者名】
神村律子

【あらすじ】
夏休みを終え、アパートに戻る俺。前の車が妙に遅い。

夏休みは今日で終わり。

俺は１人、ボロボロの愛車に乗り、都内に向かっていた。

貧乏学生故、高速なんて利用できない。

ＥＴＣも着けられない。

国道と県道を走り、ユルユルと進んだ。

しばらくして、辺りは薄暗くなり、前も後ろもほとんど車がいなくなった。

渋滞を避けるために裏道を利用しているからもあったが、やけに交通量が少ない。

渋滞よりはマシか、と思い、気にせず車を走らせた。

「何だ、この車？」

前を走る１台の白いミニバン。

運転手の右肘が全開にされた窓からニュッと出ていた。

奇異なのはその事ではない。

時速３０キロくらいしか出していないのだ。

しかも性格が悪い奴なのか、俺が追い越すために対向車線に出ると、加速する。

そんな事を何度か繰り返した。

イラついた俺は別の道に行こうと思い、脇道を探したが、運悪く一本道で、かわす事もできない。

しばらくは諦めて、そいつの後ろをノロノロと走った。

そろそろ油断しているだろう。

そう思って一気に加速した。

すると奴は意表を突かれたのか、あっさりと俺は忌ま忌ましいそのミニバンを追い越せた。

「！」

ギョッとした。

ルームミラーに写るミニバンには誰も乗っていなかった。

右肘だけが、窓から出ていたのだ。

「わっ！」

俺は急カーブに気づくのが遅れ、ガードレールに突っ込んでしまった。

「うう・・・」

エアバッグに埋もれた顔を上げ、霞む目を外に向けた。

相変わらず、奴のミニバンはノロノロと進み、やがて見えなくなった。

追い越す時はその先の道路状況を確認する。

基本を怠った俺が悪かったのだろうか？

それ以来、俺は追越ができなくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7322h/

走行妨害

2010年10月12日23時27分発行